



TITLE:

[研究報告5] パチャママの涙と夢： ペルー社会の亀裂克服の試み

AUTHOR(S):

村上, 勇介

CITATION:

村上, 勇介. [研究報告5] パチャママの涙と夢：ペルー社会の亀裂克服の試み. CIAS discussion paper No.38: 世界のエスキス --地域のカタチを読み解き、地域像を描き出す 2014, 38: 31-36

ISSUE DATE:

2014-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228600>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

パチャママの涙と夢

ペルー社会の亀裂克服の試み

村上 勇介

京都大学地域研究統合情報センター・准教授

1. はじめに

私はラテンアメリカの政治と社会、特にペルーをはじめとするアンデス諸国と呼ばれている地域を中心に研究をしています。パチャママという題になっておりますが、パチャママというのは、アンデス高地の先住民社会で信じられている、地母神のことです。今日お話します、『涙する目』というモニュメントのモチーフとなっているのがパチャママであり、それにちなんで『パチャママの涙と夢』というタイトルをつけました。この『涙する目』はだいたい高さ2メートルぐらいあります（図1）（図2）。この私の背よりも少し高いぐらいですが、石でできたモニュメントで、水が流れ落ちるようになっております。それを中心にしまして、放射状に伸びる形でラビリントー正確に言えば迷宮上の模様の敷石ーが取り囲む模様になっ

ております。大人が立っているのと比較して大きさを想像していただければ、結構大きなモニュメントであることがわかると思います（文末図16参照）。

このラビリントは、直径10センチ程度の石からなっています。1980年代から90年代にかけて、ペルーにおいて、政治暴力という現象が起きますが、その石には、そこで犠牲になったり行方不明になったりした方の名前と、その時の日付が記されており、いわば追悼、鎮魂のモニュメントです。このモニュメントの作者は、ペルーに長く住んでいるものの、ヨーロッパ出身の彫刻家ということもあり、作品としてもいわゆるヨーロッパ的な、あるいは非常にモダンで現代的な彫刻で、大変抽象度の高い作品となっています。それが現代のペルー社会において、ある種の違和感を与えているということが、お話の前提になります。



図1



図2

2. ペルー社会

まずはペルー社会ということから、まずお話をさせていただきます。ペルーは、メキシコと並び、後のラテンアメリカとなるスペイン植民地の中心地であり、先住民の人々が多く住んでいたことから、非ヨーロッパ的な色彩の強い社会です。ここに示したのは、植民地時代、16世紀から19世紀の初めにかけての植民地支配の間に進んだ混血のさまざまな組み合わせ、1番左上がいわゆる先住民、白人の混血で、それから1番右下が黒人同士で、要するに、だんだん血が濃く、非白人化していくということを、16段階で表したものです（図3）。そうしたことに象徴されるとおり、どちらかと言うと、白人、ヨーロッパ的な要素は非常に弱い社会です。ペルーでは、白人は十数パーセントで、混血が50パーセント強いて、先住民ーインディオと呼ぶ場合もありますーで30パーセントに台後半となっています。これが、まさに現代の社会にも、大きな社会亀裂、社会階層の格差を生んでいます。



図3



図5

社会構造を見ていきますと、圧倒的にいわゆる下層が多いということになりますが、そのほとんどは、非白人系の人々です。つまり、階層差のなかに、こういった民族的な違いが反映されている、刷り込まれていることになります。さらに、いわば都市と農村、中心と周辺という構造のなかにも、この階層差が反映されています。これは、農村ほど貧しい人が多いということを示した図です（図4）。

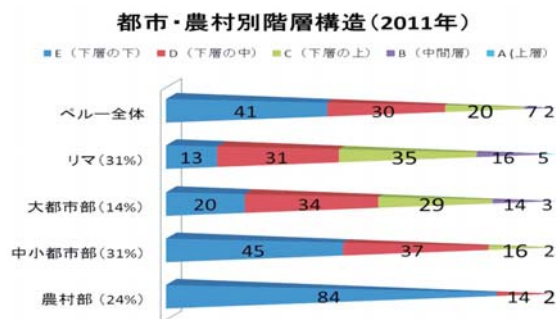


図4

そうした人々が実は非白人系で、地方に貧しい人たちが集中しているという構図になっています。

以上の構図を地図の上で確認します。こちらの地図で、少し薄く肌色っぽくなっているところがあります。おおよそ海拔800mから1000mぐらいまでの、太平洋に沿って広がっている海岸地域、コスタと呼んでいるところです。ここと、その東側にいわゆるアンデス高地が広がっており、さらに西側にセルバというアマゾン地域、アマゾン川が流れる熱帯雨林地域があります（図5）。ペルー全体からすれば、海岸地域は十数パーセントを占めるだけで半分以上の国土はアマゾン地域です。

いわゆる文明が発展したのは、アンデス高地です。近代のペルーの発展という点から申しますと、発展してきたのはこの海岸地域だけです。特に19世紀の後半から20世紀にかけて、いわゆる近代化と言われる過程がペルーでも起こりますが、そこで発展してくるのはこの地域、首都のリマ・ペルーの海岸地域の中部あたりを含む海岸地域の中部から北部にかけてのこの地域です。ここが中心になって発展していきます。それ以外の地域、特にアンデス高地は見捨てられていきました。もともと1960年代までは、アンデス高地に人口の約70%が住んでいました。しかし、近代化の過程でアンデス高地では食べていけなくなり、多くの人々が海岸地域へ移動しました。都市に向かう、向都移動が起きたのです。そして1970年代以降、人口の半数以上が海岸地域に住むことになりましたが、そうした状況になっても、発展の極は相変わらず海岸地域の中部から北部です。今世紀に入ると、いわゆるコモディティブームがあり、地方にもお

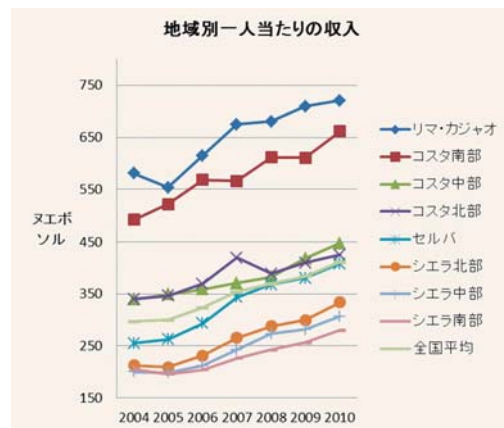


図6

金が入っていくという状況はありますが、地域間格差は縮まっていません。地域毎の1人当たりの収入を比べてみると、全体としては右上がりにはなっていますが、海岸地域が抜群に高い水準にある構造は変わっていないことが分かります（図6）。

3. 具象的なモニュメントに囲まれた抽象的な『涙する目』

ヘスマリアという首都リマの中間層が住んでいる地域の大きな緑地公園の一角に、このモニュメント『涙する目』が造られています。今「中間層の住む地区にある緑地公園」と申しましたが、リマでも半分以上の人々は非常に貧しく、しかもその人たちは非白人系、特に先住民系の血が濃くなるような人たち、そして先ほど言いました地方から移ってきた人たち、そしてその子孫たちが住んでいるというところが大部分です。そうした点からしますと、貧しくはない人々で、中間層に分類される人々の割合は16%と書いてありますが、貧しい人々の済む地区からは隔絶された場所に、『涙する目』というモニュメントは造られていることになります。しかも、緑地公園内の他のモニュメントデザインは、抽象的なものは少なく、いわゆる典型的な中間層、カッコつきの「国民国家」形成を意識したものとなっています。具体的に見て行きましょう。例えば、図は、1941年にペルーとエクアドルの間で戦争があり、ペルーはそれに勝利するのですが、その勝利を記念するモニュメントです（図7）。ナショナリズムの高揚を目的とし、勝利の女神や軍人など具体的、具象的なモニュメントとなっています。次は、リマの空港の名前にもなっているホルヘ・チャベスという、ペルー



図7



図8

人の民間パイロットの先駆的な人物として知られた人です（図8）。その記念碑がたっていますが、イカロスをモチーフにしているモニュメントとなっており、具象的です。また別のものに目を移しますと、これは日系移民のモニュメントで、ペルーと日本の架け橋ということから、橋の形をしています（図9）。もう一つ事例を挙げておきましょう。これはセルバンテスのモニュメントで、スペインの文豪を記念したのですが、国語としてのスペイン語を意識させるモニュメントです（図10）。いずれも、「国民国家」を支える中間層を意識して造られています。



図9



図10

周囲には、ペルー性といえますか、カッコつきの「国民国家」性を意識させるモニュメントが主体であるにもかかわらず、そのなかに『涙する目』がポツンとあるのはなぜか。これは、実はさまざまな経緯があってここに造られたのですが、ここでは詳しくは触れません。全体的な流れのみ概略を申し上げますと、『涙する目』が作られた背景には、1980年代から90年にかけての政治暴力と言われているものがあります。これは広い意味では60年代、70年代にラテンアメリカで成立した軍事政権の下で、人権侵害が起きたことに由来します。それが大きな問題になり、1970年代末以降、民政移管して、その真相究明をし、さらにそれを忘れないために、あるいは繰り返さないためにモニュメントを造る運動が、アルゼンチン、チリといった国々で起きました。この流れに、ペルーの事例も入ってきます。ただ、ペルーの事例がほかの国と違うのは、人権侵害をはじめとする、いわば政治暴力の問題が、軍事政権下ではなく、軍事政権の後、民政下で起こったということです。少しややこしいですが、ここからが重要な部分なので、丁寧に説明しましょう。

4. 民政下の暴力—ペルーの特異性

ペルーの軍事政権は、いわゆる左派勢力に対しては、見方によっては寛容な、一部を政府に取り込むような形で改革主義的な路線をとりました。その意味では、左派全体に対して、追放をした例はありましたが、抑圧をすることはありませんでした。そういった状況のなかで、むしろ問題になるのは、ペルーは80年に民政移管をしますが、それ以降、反政府武装組織が出てきたことです。代表的なものは、センデロ・ルミノソ（輝く道）という名前が付けられた、毛沢東主義派の組織です。非常に残虐な組織で、『アンデスのクメール・ルージュ』とも言われました。毛沢東派ですので、農村から都市へという戦略をとり、アンデス中央のあたり、アヤクチョ—ここは、私の調査地でもあります—というところを拠点にし、そこから全国に広がっていきました。政治暴力自体は90年代、フジモリ政権ができて、いろいろ問題があったにせよ、鎮圧し、治まっていきました。その後、真相和解究明委員会というのができ、その報告書が出され、モニュメント『涙する目』が造られ、そしてさらに、博物館を作ろうという動きまで出て来ました。ただ、ペルーの場合は、ほかのところ

と少し違います。たとえばブラジル、アルゼンチン、チリ、ウルグアイなどでは、いわゆる国家暴力という形で、軍、つまり国家が市民を虐殺するという形で進みました。しかしペルーの場合は、むしろセンデロ・ルミノソが市民を含め虐殺するということがありました。もちろん、国家からの暴力ということもありましたが、いわば反政府武装組織によって殺される市民が非常に多かったということです。真相和解究明委員会の報告書でも、一番の人権侵害の犯人は、センデロ・ルミノソであったということが結論で、軍はその次だという話になっております。こうした経緯から、何を追悼するか、何を記憶として残すかということが、大きな問題になっております。つまり、ペルーの特異性は、国家対市民という図式が成り立ちにくいということです。

5. 涙する目のカタチを読み解く

この『涙する目』というモニュメントの意義を少し考えてみたいと思います。少なくとも現在までのところ、この『涙する目』というのは、ある彫刻家が良心的に作ったモニュメントではありますが、残念ながらその目的を達成するには至っておりません。これは先ほど申しました政治的な問題につながりますが、これはひとまず置いておき、むしろ私なりに読み解いたカタチで提示させていただきます。

まず1つは、先ほど言いました、リマという、特に中間層が居住している地区に存在しているということです。センデロ・ルミノソを中心とする反政府武装組織による暴力の犠牲者は、最後の段階ではリマで多数の犠牲者を出しましたが、全体としてみると、60%はアンデス高地、農村に住んでいる人たち、農民イコール先住民系の人々でした。その意味では、首都リマにある『涙する目』は、犠牲者たちの場所から遠くにある印象を持ちます。これについては、世論調査などはなされていませんが、研究者や記者、あるいはアヤクチョの人たちの一致した意見として申し上げておきたいのは、『涙する目』は、反政府武装組織の活動が非常に激しかったアンデス高地で知られているかということ、実はまったく知られていないという現実があります。その意味ではリマ的な、より踏み込んで言えば、人権団体の人たちはよく知っていますが、アンデス高地の先住民の人たちにはあまり知られていないという現状があります。

それから、まさにその抽象性と言いますか、ヨーロッパ的で近代的な形をした彫刻ということで違和感も受けます。先住民の人々が多く犠牲になったということを申し上げましたが、では彼らはどのような形で、いわばこの時代のことを記憶しようとしているのでしょうか。ここでいくつか例をあげてみましょう。一つは非常に伝統的なやり方です。図11は、『箱型の祭壇』という、もともと



図 11

はキリスト教の教えなどを象徴的に表すもので、最近ではお土産としても売られている伝統工芸品です（図11）。これがまさに、記憶として残す媒体として使われています。これは、ある方が作ったものですが、地方でいろいろと事件が起きているのに、中央のリマの政府は全然何もしてくれない、ということを表しています。（図12）図13は拡大したものです（図13）。それから図14は、さまざまな虐殺が起きていることを表しているものです（図14）。もう一つの媒体が、『サルワの板絵』



図 12



図 13

です（図15）。サルワという地域に伝わる、もともとは親戚や両親、あるいはコンパードレス（名付け親）などが、結婚した夫婦、親戚の人たち、子どもたちに、人生にどのようなことがあったのかを記録するために、家の柱や壁に掲げる絵です。そういった伝統的なものを使って、村でということがあったのかを記録していくこともなされています。

さて、違和感があるという話に戻ります。最後の私の違和感は、このモニュメントは、冒頭に申しましたように、個人の名前、犠牲者の名前を刻んでいくことを基本にしています。確かにそれは記憶として非常に重要だと思いますが、この記憶はその犠牲者だけに還元されるものでは決してありません。特にアンデスの山や共同体に入ると、「隣人同士の争い」と呼びますが、そういう色彩が非常に強いのが、実はこの政治暴力でした。もともとアンデスの共同体社会の中で、村のなかでも、あるいは村同士でも、あるいは家族同士で、などなど、さまざまな争いがありました。土地をめぐる争いや、水をめぐる争いなどです。そういったものを利用してセンデロ・ルミノソが入っていくということがありました。一方がセンデロ・ルミノソで、他方がそうではないという関係が、村のなか、家族のなか、あるいは村と村との間にありました。それが、地方での記憶として残っています。それらは、先の触れました民芸品でも記録されておりますが、むしろ、アンデス高地に住んでいる人々にとっては、そうした記憶のほうが身近な記憶です。つまり、少し隔絶した、あるいは亀裂、



図 14



図 15

ポストコロニアル的な亀裂と言ってもいいかもしれませんが、そういったものを反映する象徴として、『涙する目』は、実は現在まで存在していると言わざるを得ません。

6. 『パチャママの涙』ではなく『パチャママの夢』として

しかし、このモニュメントを現在、過去、つまり20年前から今という時間軸ではなくて、将来に向けてみると、別の読み方もできるのではないかと思います。よく言われることですが、未完のペルー性、創造の過程のペルー性、ラテンアメリカ性、あるいはコロンビア性、メキシコ性など、ほかのラテンアメリカの国々も含めて、何をもって自分たちのアイデンティティとするかと問われた時に、実は、ラテンアメリカの多くの国々においては、その答えはまだまだ固まっていないという認識があります。多様なメキシコとか、複数のメキシコといった言い方もありますし、さまざまな形でということは表現されています。ペルーにつきましても、固まったものではありません。

こうした中で、もうすでに亡くなってしまいましたが、ペルー人の文化人類学者ロベルト・ミロケサダが、アンデス的なものは、結局ペルー的なものではないのだと、少し逆説的なことを言っています。アンデス的なものだけで、そのペルー性は将来作られるものではない、ということです。アンデス的なものもあれば、白人的なものもあるだろうし、あるいはアジア的な—アジア人の移民もいますので—日系をはじめとする、そういったさまざまな要素があって、それらがどういう形で何らかのまとまりになっていくかというのは、なかなか難しい、まだまだ創造の過程にあります。そういったものが何らかの形で、基盤はそれぞれに置きつつも、最後は全体として、将来いつになるかわかりませんが、ときには衝突しつつ、ときには協和しつつ、最後は何らかの像を結んでいくのであろうと考えることができる、ということを行っています。その観点からみますと、まさに今の『涙する目』は、パチャママの涙という表題がついており、中心になるパチャママの像から放射状に涙が流れ出ていくという形で構想されていますが、そうではなく逆の読み方があるのではないかと。つまり遠心的ではなくて、むしろ求心的にそれぞれが違う立ち位置から、あるいは場所から出発しても、どういう形になるか、どういう経

路を経るかわかりませんが、最後は何らかの形でパチャママの像、中心に何らかの像を結ぶであろうという逆の方向性です。このモニュメントをこのように読み解くような状況が生まれてくるとすれば、おそらくペルーの、今のような分裂・亀裂が、少しでも変わってきている、そういう兆候として読み取る、理解することができるのではないかと考えております。(図16)



図16

以上の議論を受けて、命名するのは少々おがましいですが、『パチャママの涙』ではなくて、『パチャママの夢』として、このモニュメントが読み返されるようなことがあったら、おそらくペルー社会は大きく変わりつつある、大きく変わる舵を切り始めているのだと言えるのではないかと考えております。